

小学校3年生の時でした。学校帰りの道は大雨にみまわれました。傘をさしても意味がないほどの雨で、ほとんど全身がずぶ濡れになってしまっていました。最初は友達と、大雨を嘆きながらの帰り道でした。やがて「じゃあね」とか、「また明日」という声を残して、友達は視界から消えていきました。一時でも早く、この大雨から逃れられる友達をうらやみながら、帰り道を急ぎました。

道の右側には小さな川が流れていましたが、もはやあふれだして、道の表面は泥の色をした水がおおい、長靴に抵抗を感じるほどでした。道の左側の田んぼも同様で、稲は水流に押し倒されていて、道と田んぼの境目さえ見えにくいほどでした。私の歩く道は、右側の小川と左側の田んぼが、あふれた泥水でつながってしまっていて、自然と歩く速度も遅くなっていました。

その時、左側の田んぼから、バシャバシャと、水が跳ねる音がしました。雨が水面をたたく大きな音に負けないほどの勢いで、バシャバシャという音が聞こえます。私の好奇心はその音のする方に向かいました。

目に飛び込んできたのは、巨大な魚が浅瀬に乗り上げてうごめいている姿でした。得体の知れない黒い魚。とにかく巨大なその魚は、大雨と闘い、怒りを表すかのように、勢いよく跳ね回っていました。

私は傘を放りなげて走り出しました。家にたどり着くと、玄関に立て掛けてあった網を手に入れました。そしてすぐに大雨の中を、田んぼに向かって再び走ったのです。

その巨大な魚は、まだそこで、大雨と浅瀬と水流に対しての格闘を挑み続けていました。しかし、さっき見た時より勢いを失っているようでした。私は近寄りたいたい思いを抱きつつも、勇気をふりしぼって、その巨大な魚に網を伸ばしました。魚の巨大さゆえになかなか網に収まりません。空から私をたたきつける雨は、もう存在を失っていました。今度は私と巨大な魚の闘いが始まったのです。

近寄ることは恐怖でも、一方で好奇心が勇気をもたげさせます。雨の中で汗をかきながら巨大な魚と格闘し、やがて私の勝利する時が訪れました。網に閉じ込められた魚は、それがまるで私への復讐であるかのように、網を通してその重さを伝えてきました。

家に帰ると、すぐにその巨大な魚を、庭にあった池に放しました。ずぶ濡れのまま自分の部屋に飛び込み、凶鑑を手にして、その魚を探しました。それは雷魚という名前でした。雷に魚と書いて雷魚です。私はその勇ましい名前のとりこになりました。そして、そのような魚を捕まえた自分に酔いしれました。

すぐに父親にそのことを知らせました。父は本当に驚いてくれて、雨の中を池まで出てくれて、「ほー、大きいなあ。強そうだなあ」と言いました。母親は後から池の所までやってきて、「うわー、なんだか怖い感じ」と言いました。私は両親の言葉を聞いて、その大きく強く怖い魚を捕まえたのが自分であることを、誇りに思っていました。

その頃の家には、庭に小さな池がありました。父親と一緒に地面を掘って、掘った所を2人で踏み固め、セメントで表面を覆った池でした。何日もかかって掘り、セメントを塗り付けて、何日も乾かして、その後、何度も水を入れ替えて、かなりの手間ひまをかけて作った池でした。

その池には金魚を何匹も飼っていました。餌を毎日与えて、金魚はずいぶん成長していました。毎日の数分間を金魚を眺めて過ごし、時折父と一緒に池の掃除をするのも楽しみでした。餌を与えるのを忘れたこともなく、小さかった金魚が大きくなっていくのを見るのは、私の喜びでした。

雷魚を池に放した翌日、金魚は一匹もいなくなっていました。何が起こったのかわかりませんでした。改めて図鑑を調べました。そして、雷魚によって金魚が食べられたのであろうことを知りました。

泣きました。前日の勝ち誇ったような喜びの分だけ、余計に悲しかったのです。せっかく育ててきた金魚が、あの雷魚に食べられてしまったのです。あんな魚を捕まえるんじゃないかと後悔しました。自分の愚かな行為に憤り、憤った分だけ涙が流れました。

新聞に、次のような記事が載っていました。

「地下鉄・東銀座駅のホームで、5歳ほどの男の子が『ママ、ママ!』と泣きながら走り回っていた。黄色いレインコートを着ている。幼稚園帰りに母親とはぐれたらしい。走ってくる子どもを抱きとめた。『どうした?ママがいなくなっちゃったのか』。男の子はこっくりうなずくと、また泣き出した。手を強く握ってくる。よほど心細かったらしい。『駅員さんに放送してもらおう。すぐ見つかるぞ。だから、もう泣くな』。

手を引いて、ホームの端にある階段に向かった。と、男の子が立ち止まり、階段の方を見た。階段の踊り場に30歳前後の女性が立ってこちらを見ている。しかし女性は無表情だ。どうやら別人のようだった。しかし階段の下まで来ると、男の子はその女性の顔をじっと見てから『ママ!』と走り出した。何だ、やはり母親だったのか。

次の瞬間、信じられないことが起きた。女性はバッグをつかんで子どもの頭をたたいたのである。ぱあん、と音がし、通行人が振り向いた。

女性は私に『うちの子です』と言うと、泣く子を引きずるようにホームに向かった。『すみません』も『ありがとう』もなかった。

迷子になったわが子が見知らぬ男に手を引かれてくるのを、ただ立って見ている。世話になった礼も言わない。見つかって最初にしたのは、子どもを殴ること」。

子どもが抱く親への信頼感や、親と一緒にいることの安心感は、徐々に育っていくものです。さらには、親が傍らにいて見守っていてくれると知ることによって、子どもは自分への信頼感や、自分が自分であることに安心感を見いだせるのです。

それらは、ゆっくりとした時間の中で育まれる心の姿勢です。何か劇的な出来事によってではなく、ただ親が存在することによってでもなく、親子の間に流れる時間と、そこで培われる関係によって築き上げられていくのが、信頼感や安心感なのです。

いうならば、小さな金魚が毎日忘れられることなく餌を与えられて、だんだんとゆっくりと大きくなっていくように、子どもは親からの愛情を感じるという経験の積み重ねによって、だんだんとゆっくりと親との関係を築き、そこに信頼感や安心感を得ることができるのです。

迷子になった我が子を見つけて、最初にしたことはたたくこと。それは、せっかく育ててきた金魚のいる池に、いきなり雷魚を放つようなものです。少しずつ大きくなってきた信頼感も安心感も、雷の魚によって全部食べられて無くなってしまうのです。

迷子になった我が子を見つけて、最初にすべきことは、ほほ笑むことです。「心配したよ。迷子にしてごめんね」とあやまることです。そして「待っていたよ」と抱きしめることです。そこに雷は必要ありません。それよりも、一生懸命に心を巡らして待っていたことを表すことが大切なのです。

ある大学の心理学教室で、待ち合わせをしている人が、遅れて来た相手を何分くらいまでなら待つことができるか、ということ調べたことがあったそうです。場所は渋谷のハチ公前です。

その結果、約束の時間が過ぎて15分くらい経つと、だいたいの人がキョロキョロ、ウロウロしはじめ、そして30分待っても相手がやって来ないと、待つのをやめてその場を立ち去ってしまうというのです。待つことのできる限界は、平均30分だったというわけです。

現代人は、人を待つことにわずか30分しか我慢ができないくらい、待つことが苦手になっているということでしょう。

コンラート・ローレンツという動物行動学者は、犬を訓練する場合に一番最初に教えることは「待つ」ということであると言っています。

犬のみならず動物というのは、じっとしていることが大の苦手なのだと言います。なるほど「動物」とは、動く物と書きます。さぞかしじっと待つことは苦手なのでしょう。

自由に、思いのままに動こうとする犬に対して、「待つ」ことを教えられたから、犬は人間のパートナーになることができたというのです。犬がその先祖であるジャッカルやオオカミから人間の仲間になることができたのは、「待つ」ことを学んだからだというわけです。

そしてローレンツは言っています。「犬は飼い主との深い信頼関係があってはじめて、『待つ』ことができるのです」と。

「待つ」ことのできなくなった現代人の問題は、単に忙しいからということだけが理由ではないようです。「待つ」ことのポイントは信頼関係です。それならば、相手に対する深い所での信頼関係をなくしていることが、「待つ」ことができない大きな原因かもしれません。

児童精神科医の佐々木正美さんは、「待つ」ことについて、次のように言っています。

「教育とか育てるということは、私は待つことだと思うのです。『ゆっくり待っていてあげるから、心配なくていいよ』というメッセージを、相手にどう伝えてあげるかです。子どもに限らず人間というのは、必ずよくなる方向に自然に向いているわけです。けがでも、ほうっておいたって、必ず治る方向へいくわけでしょう。ばい菌がつかないように、消毒だけしておけばいいのです。風邪だって薬なんか飲まさなくたって、じっと休んでいればたいてい治るわけです。

人間の体というのは必ず治る方に行く、よくなる方へいこうとするのです。あるいは成長しようとする、発達しようとするのです。…特に元気ざかりの子どもなんかは、すべてのことが必ず、いい方へ向かおうとしているのです。

だから、邪魔をしなければ、みんないい子になって、個人差はありますが、子どもなりの素質と個性と能力で、みんな発達していくわけです。ですから、待つという姿勢ができましたら、もうこれで、人でも何でも育てることの名人になれると思います。このことは、草花を育てるのも、野菜を育てるのも、果物を育てるのも、人を育てるのもまったく同じで、ひそかに最善を尽くして、じっと待っていればいいのです。待つことに楽しみや喜びを感じられるようになったら、人でも、ものでも、育てるのは上手になりますよね」。

「育児をするうえで最も大切なことは、子どもに生きていくための自信を持たせてあげることです。それには子どもにとって、最大のサポーターであり理解者が親なのだということが、子どもに通じればそれでいいのです。あとはイライラしたりあせったりしないで、じっくりと育児に取り組めばいいのです。

こちらがあせっていると、子どもは大きくなるにつれて、もっとあせります。ですから、何事もちょっとやってみて、どうも駄目そうだと思うと移り気をおこして、すぐぱっと変わろうとするようになりがちです。何をやっても自信が持てなくて、成果があがってくるまで、自分で自分を待てない子になりがちでしょう。ですから成長や発達してくるのを、あるいは、いろんなことが身についてくるのを、こちらがゆっくりと待ってあげる姿勢を普段からもっていると、それが子どもにも身につきます。忍耐強さが身につくといってもいいと思います。

ですから、待ってあげる姿勢は、子どもを十分信頼しているという気持ちを伝えることにもなります。このことは子どもへの愛を、子どもに最もわかりやすく伝えることになるのです」。

私が大阪で保育園に勤めていた頃のことです。もう20年近く前になります。お酒を飲んだ帰り道でした。JR環状線の駅をおりて、そこから住み込んでいた保育園までの道を歩くのが面倒臭くて、駅前からタクシーに乗りました。

タクシーの後部座席に座ると、運転手さんが言いました。「どこまで行きまひょ?」。「すみません。春日出中1丁目なんですわ」。「なんか目印になるもんありまっか?」。「天使保育園っていうとこなんですけど」。「ああ、知ってますわ。私地元ですさかい。

そこの保育園に行かはるんでっか。「そうなんです」。「なんでまた、こんな夜中に保育園ですねん?」。「ああ、ボクこう見えても保育園で先生してますねん」。「へー、そうでっか」。

そんなやりとりがあって、タクシーは走り出しました。しばらく走って信号待ちになると、運転手さんが言います。「ちょっと、相談にのってほしいことがあるんやけど、よろしいか?」。「えっ、いったい何ですのん?」。「保育園の先生やと見込んでの相談でんねん。ちょっと車止めさせてもらいますわ。もちろんメーターは倒しときますさかい」。

そう言うと、タクシーは路肩に寄って停車しました。

「あんね、ウチとこの子、小学校3年生になるんやけど、今でもおねしょしまんねん。おかしいでっしゃろ? 他の子にそなんおらへんもん。ほんでね、私らも苦労してまんねん。毎日嫁はん布団干さんならんし、アパートやからみんなに布団干してんのんバレてしまうし。シーツの洗濯かて、毎日毎日大変やって嫁はん言いよりますねん。だいたい、小学校3年にもなって、おねしょはおかしいでっしゃろ?」。

「そんなことありませんよ。おねしょに年齢制限あれへんもん。ボクねえ、自慢やないけど、12才までおねしょしてたんですわ。けど今は別に普通の大人ですよ。今おねしょせえへんもん。お子さんもいずれおねしょしんようになりますって。遅かれ早かれちゅう話ですわ」。

「しゃあけど、ほとんど毎日でっせ。せやからシーツの下にビニール敷いたりして、おねしょの被害を防ぐことはやってますねん」。

「運転手さん、それがアカン。ビニール敷いたら寝心地悪いやんか。寝返りうったらカサカサ音するがな。それにおねしょのためにビニール敷くなんて、『おまえは信頼できん』言うてるみたいなものやし、子どもにとっては無茶苦茶プレッシャーですよ。そら、おねしょ止まらへんわ」。

「そんなもんでっか。ビニールあきまへんか? けど、洗濯や布団干し大変でっせ」。

「そなん、かまへんのとちやいますか? 寝心地のええ布団で寝る、ほんで、おねしょしても親はニコニコしてる。『ええで別に、おねしょぐらいかまへんやんけ』と笑い飛ばしたる。『おれもおねしょぐらいしとったし、総理大臣も大統領も学校の先生も、みんなおねしょの経験者や。ええで、ええで、おねしょぐらい』って、そなん言うたるのが、親の努めやと思いますわ」。

「そんなもんでっか? けどなあ、おねしょの布団干すのかっこ悪いですわ。近所の人みんな、ウチとこの子が小学校3年生って知ってるもんなあ」。

「そなん、本人が一番知ってるし、本人が一番かっこ悪いって思ってるって。ウチの母親ね、布団はボクのために3枚用意してたって言うてましたわ。毎日お天気ちゃうし、3枚の布団でいつでもおねしょできるように、ローテーション組んでたって言うてたから、阪神の監督より偉いと思うわ。そのぐらいの覚悟で待たせてくださいよ。おねしょなんていづれせんようになりますって。もし12才過ぎてもおねしょするようやったら、ボクが責任取りますわ」。

「そうですか。そこまで言われたら、いっぺんやってみますわ。ビニールやめて、布団増やして、おねしょされても文句言わへんかったらええんですな。ほんで『かまへん、かまへん』って。『おとうちゃん、待っとくさかい』って言うたらええんですな」。

「いや、ちょっと違うわ。『おとうちゃん、待っとくさかい』っちゅうのは言い過ぎですわ。それがまたプレッシャーになる。せやから『待っとくで』は、心の中で思っというて下さい」。

もちろん、その運転手さんのお子さんのおねしょがどうなったのかは知りませんが、その日の私の帰宅は30分ほど遅くなりました。相談にのったのだからタクシー代をまけてくれるかと期待したのですが、きっちりメーター通りに請求されました。さすが大阪です。

子どもに限らず、かけがえのない他者の将来の様子や、未来の姿を、私たちは見ることができません。しかし私たちは、その人が祝福された人生を歩んでくれることを願っています。私たちは自分にとって大切な人の幸せを心の内側に願っているのです。

聖書は言っています。「霊の初穂をいただいているわたしたちも、神の子とされること、つまり、体の贖われることを、心の中でうめきながら待ち望んでいます。わたしたちは、このような希望によって救われているのです。見えるものに対する希望は希望ではありません。現に見ているものをだれがなお望むでしょうか。わたしたちは、目に見えないものを望んでいるなら、忍耐して待ち望むのです」。

人間関係は時に、わずらわしさや、うっとうしさや、面倒臭さや、やかましさを、大変さを運んできます。忍耐が必要なことでもあります。しかしそれは、相手の心の中に育つ、信頼感や安心感のための過程でもあるのです。

どのような人であっても、それは神さまから与えられた命です。かけがえのない命です。私たちは人間関係の中で、その人の生きる途上でのあらゆる場面において、「待つ」ことを大切にしたいと思うのです。「待つ」ことのできる人は、いたずらに結論を急いだり、ちょっとしたことにあわてふためいたりせず、ゆったりと心を強くして生きることができるとは思いません。「待つ」ことこそ最も大切なことなのです。

人は間違えることがあります。しかし、間違いながら知っていくのです。正解や真実を自分のものにしていきます。人間は愚かです。金魚の群れの中に肉食魚である雷魚を放ったりします。しかし、そこで経験する悲しみや後悔も、人間としての成長ということなのです。自分の間違いも、他者の間違いも見守りながら、待つことのできる者でありたいと思います。

詩編 126編はうたっています。

涙と共に種を蒔く人は 喜びの歌と共に刈り入れる。

種の袋を背負い、泣きながら出て行った人は 束ねた穂を背負い

喜びの歌をうたいながら帰ってくる。

すべての命には神さまの祝福があります。そしてその命を見守り、その命に寄り添おうとするとともに、やはり神さまは祝福を与えてくれるのです。

私たちのまわりにいる人たちのうえに、大きな恵みと祝福があるように願いつつ、私たちは「待つ」ことのできる者でありたいと思うのです。命の息吹は「待つ」ことによって育まれます。「待ってもらおう」ことによって、人は人に対する信頼感や安心感を与えられ、「待ってもらおう」ことによって人間は、自分自身への信頼感や、自分が自分であることへの安心感を備えられていくのです。

そして「待つ」ことは、いつも私たちのことを待っていてくれる主イエスに応えることでもあります。

希望をもって、祈りながら、待ち続けることのできる者になりたいと思います。